

Title	宮地巖夫の異文化理解・異文化受容について
Author(s)	黒田, 宗篤
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/55707">https://doi.org/10.18910/55707</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 ( 黒田宗篤 )

論文題名

宮地巖夫の異文化理解・異文化受容について

## 論文内容の要旨

本研究は、明治―大正期の大日本帝国という国民国家の「尊厳」を語る上で重要な地位にあった平田家門人の国学者・宮地巖夫(1847年―1918年)の異文化理解・異文化受容について検討したものである。

「大日本帝国憲法」(国立公文書館所蔵)は、「第一条」において「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」、「第三條」においては「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と規定している。国家元首である天皇が「神聖」とされる根拠的理由は、記紀、即ち神道に起因している。つまり、大日本帝国という統一された国民国家が元首の天皇を「神聖」としている以上、国家としての「尊厳」の根源は神道にあるといわざるをえない。

本稿で検討対象とした宮地巖夫は、明治初期にあつて信徒数100万人を超える伊勢神宮に関わる宗教団体の神宮教において、管長の次席である弁理兼教務課長として神宮教全体の教務を指揮し、1888年からは宮内省式部職掌典に就任して明治天皇直属の祭官となった。彼は、勅使をつとめたほか、宮中祭祀、神社祭祀の創定、皇典講究所の講義などを担当した。彼は、明治―大正期の神道界にあつて「元老」と呼ばれていた。

宮地巖夫は、国家と神道を語る上で重要な地位にあつたが、史料の散逸が原因して彼の生涯史や活動が長年不詳となっていた。その欠点を補ったのが、黒田宗篤『宮地巖夫研究1 ―その半生について―』玉廬舎塾(2011年)であり、研究者らによる史料解釈や学説の誤りを是正したのが、拙著『「宮地神仙道」という幻想』玉廬舎塾(2014年)である。

本研究は、拙著の研究成果を前提として、宮地巖夫の異文化理解・異文化受容について調査し、彼がその生涯を捧げた「大教法」構想の実態を復元したものとされている。

「大教法」構想とは、Herbert Spencer(1820年―1903年)の予測する所の文明社会において供されるべく、全世界の思想、宗教、道徳を平田国学を中心に統合して、世界に先んじてその「道徳」を普及させようと意図したものである。

まず、「1はじめに」においては、本論文の研究成果が、宮地巖夫の異文化理解・異文化受容を明らかにすることによって、先行研究において、または歴史上において未解明とされてきた明治国家の尊厳を担った中心人物の異文化受容・異文化理解の実態とその結論が得られるという点にあることを示した。それは、また同時にWestphalian sovereigntyに対する明治―大正期の平田国学からの回答でもあることを示した。つまり、本研究は、明治国家という国民国家の尊厳を守る上での、異文化受容の許容点・拒否点の境界の一端を示したものとなり、その点において言語文化的にまたは史的方面において価値のある研究となっていることを紹介した。

「2宮地巖夫の経歴、学問的背景、社会活動について」においては、拙著『宮地巖夫研究1 ―その半生について―』玉廬舎塾(2011年)が公刊される前までは、活動実態が不詳とされて来た宮地巖夫についての基礎的調査を纏めた。本論文では特に拙著の未検討部分をも合わせてそれを簡潔に纏め、彼の生涯史、学習歴、社会活動歴の全体を整理して本論への導入と位置付けた。

「3宮地常磐、宮地再来の著作及び思想について」においては、宮地巖夫の思想に影響を与えたとされる潮江天満宮社家の宮地常磐・宮地再来父子に関わる調査を行った。その結果、父の宮地常磐は、土佐勤王党関係者であり、幕末期から宮地巖夫との接触が濃厚であったこと、常磐の学術は平田国学の影響よりもむしろ鹿持雅澄の国学の影響が濃かったこと、西洋砲術を学び最新の海外の情報に接する立場にあったことなどが明らかとなった。一方、再来については、平田国学の補完・発展を行い、道教と神道の習合思想を研究し、これに加えて貝原益軒の百科の学まで進出していった碩学であったことが判明した。

「4宮地巖夫の「大教法」構想について」については、宮地巖夫がその人生の大部分を捧げた「大教法」構想についてその発生史を纏め、断片的な文書記録から構想を復元した。その結果、平田国学のほかにHerbert Spencerの

社会進化論をも導入し、「神代」という過去の道徳を明らかにする平田国学の発想を現今の学をも導入して未来の道徳を明らかにする国学に研究の方向を転換させていたことが明らかとなった。これは、国学発生史上、特異の発想であったといわねばならない。彼は、その成果を『世界太古傳実話』として纏めるに至ったことが本調査で明らかとなった。

「5宮地嚴夫の世界認識1—「亜細亜」への視座—」及び「6宮地嚴夫の世界認識2—「西洋」への視座—」においては、明治初期「大教法」構想から晩年の『世界太古傳実話』の執筆に至るまでの間の宮地嚴夫が、どのように「世界」を見ていたのかを整理、検討した。「大教法」構想が「世界」を意識している以上、彼の対外觀の調査は必須であると思われる。

調査結果として判明したのは、彼は、「世界」の「古伝説」を事実として認定する上で、平田篤胤の学説と革命の多寡を基準にして「日本」、「東洋」、「インド」、「西洋」、「米国」の順に信用の優先順位をつけて捉えていたことが判明した。また、海外における時事情報などは、主に新聞・雑誌・翻訳書・知人からの情報が主であって、その情報は、明治會などの国威宣揚に関連する活用が主であったことが判明した。

「7宮地嚴夫の日本論」については、宮地嚴夫がどのように「日本」という存在を捉えていたのかを検討した。Westphalian sovereigntyに「日本」という国民国家が組み込まれていく過程で、彼が何を意識し、何を国民に要求していたのかということとを彼が理想とする「日本」像、「天皇」像、「国民意識」像を中心にまとめた。その結果、宮地嚴夫は、国民国家の基本である「日本人」を意識し、国民精神を分裂させる恐れのある政党や宗教には非寛容的な立場をとった。彼は、国民精神の中核を明治天皇の「大御心」に基づく「皇道」に求め、それを「神道」として普及活動に従事する姿勢をとっていったことが明らかとなった。

「8宮地嚴夫と平田系玄学」においては、「大教法」構想において核となる「天之御中主神」観について纏めた。宮地嚴夫が考える世界秩序は、世界共通の始祖神を根幹に据えて話を進めねばならず、日本名を「天之御中主神」であるとした。宮地のイメージする所の「天之御中主神」像は、ほぼ当時の日本人有識者と一致する内容であり、特異と評価できるほどのものではなかった。また、彼がイメージする世界秩序は、平田篤胤の「玉櫛」平田篤胤全集刊行会編『新修平田篤胤全集 第6巻』名著出版(1977年)所収の「毎朝神拝祝詞」の内容と共通する点が多いことも指摘しえた。平田の「毎朝神拝祝詞」には、敬神生活の有り方が描かれている。

「9『世界太古傳実話』の分析」については、公刊された2種類の『世界太古傳実話』について分析した。1種類目は、宮地嚴夫自身の監修本である。2種類目が宮地嚴夫没後に教派神道関係者が抄出して纏めたものであった。後者の抄出本は、宮地嚴夫が企画した一冊一講話の原則を無視し、恣意的に抄出文書を合成したものであったことが判明した。ただ、後者の文献は、宮地嚴夫が纏めようとした『世界太古傳実話』の「残巻」の集積として検討した場合、靈魂論、大元の神、先入観、天地開闢、別天神などに関する彼の見解が明らかにされていることと、編者による合成箇所の誤りが明らかになった。

「10宮地家情報を元にした「天津祝詞」の解釈についての一試論」は、宮地嚴夫・宮地再来の研究成果を利用することで、長年不祥とされて来た「天津祝詞」に対し、平田国学の立場から新解釈を提示することが出来るようになった。これは、1918年の宮地嚴夫の死去以来、近代アカデミズムの普及によって頓挫していた平田国学の手法をあえて活用し、平成という現代に平田国学による研究を復元させるという新規の試みとなっている。

この試みは、平成における平田国学復元プロジェクトとして研究が進められており、拙著「記新解釈の可能性造化神・磐長姫神と美の世界」『錦旗文化 興復第1巻第1号』(2015年)という研究もある。平田篤胤や宮地嚴夫らが想定していた平田国学を現代という時代に復元するのであれば、どのような研究となっていたのか。それを彼らの思考パターンを割り出し、復元していくことで宮地嚴夫が子孫及び後世に托した「大教法」構想の成果の一部がみえるものとなっている。

「11おわりに」においては、宮地嚴夫の「大教法」構想の纏めとその結論、問題点、今後の課題について纏めた。

近代日本がWestphalian sovereigntyという国際秩序を受け容れて近代化していく過程で、それに対抗しうる国際秩序を平田国学を基幹とし、Herbert Spencerの社会進化論の発想を導入することで新たな「道徳」を生み出し、世界へ輸出するという彼の試みは、課題が山積してその全てが成功したとはいいい難いものであった。

彼の「大教法」構想の欠点は、日本の神道を主とするが故に、諸外国の宗教との習合に成功したとはいいい難かった。習合先の宗教においても、例えば、道教の「三天太上道君」、「無極太上大道君」のように、その名前そのものが「老子」の説く「道」に反しているにもかかわらず、それについては無批判に受け容れていること、現実的な社会の問題として、日本の欧化政策が進み、海外に世間の感心が向く中で、「日本人」そのものの日本の精神を再構築しなければならなくなり、それを明治天皇の詔勅に求めなければならなかったことが挙げられる。つまり、異

宗教間を同一思想で統一することは、実際において困難であったといわなくてはならない。

明治一大正期の日本は、どの国家よりも識字率が高かったものの、諸外国の文書そのものを国民の多くは読んではいない。新聞や雑誌、翻刻書、人づてに聞く噂などによる情報が精々であった。宮地巖夫とは、その範疇に入る国民であった。その国民が、**Westphalian sovereignty**という時代的雰囲気の中で、日本発の世界共通の「道徳」を平田国学を活用して世界に提示するという挑戦は、今を生きる現代人の目から見ると滑稽に映るかもしれないが、過去の神代を求めればよいとする国学研究を社会進化論の提示する未来の文明社会をリードする「道徳」として表現する研究に移していった。これは、国学研究史上における歴史的転換に相当する発想であったと評価してよい。

彼の「大教法」構想が途上に終わったのも、目指した先が社会進化論の待つ未来の文明社会にあるが故であって、途上は自明であるといえよう。つまり、彼は予測された大きな歴史の流れの中で、その過程であろうとしたのが本論文における宮地巖夫研究の結論といえる。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 黒田 宗篤 )			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	教授	伊勢 芳夫
	副 査	教授	中 直一
	副 査	准教授	ヨコタ村上 孝之

## 論文審査の結果の要旨

黒田宗篤氏の研究は、国学者として平田篤胤を継承し、明治・大正期の神道界にあって指導的立場にあった宮地嚴夫の思想的足跡を辿り、日本の近代化にあたって国学者・神道家としていかに「西洋」という異文化を理解し、受容しようとしたかについて歴史資料を基に検討したものである。

黒田氏は、多くの著作物が散逸や門外不出とされたために思想遍歴や活動が長年詳らかになっていなかった宮地嚴夫に関して、図書館や生前の宮地の関係施設において、そして宮地の子孫に問い合わせることにより、貴重な資料を数多く発掘し、収集した。また、宮地嚴夫の思想に影響を与えたとされる宮地常盤・再来父子についても綿密な調査を行い、『宮地嚴夫研究1——その半生について——』（玉廬舎塾、2011年）と『「宮地神仙道」という幻想』（玉廬舎塾、2014年）を出版している。それらの著書を土台として、本研究が積み上げられているのである。

本論文は11章から構成されている。

「1 はじめに」において、明治期から大正期において神道界で指導的立場にあった宮地の異文化理解・異文化受容を分析することの意義として、西欧列強の絶大な影響力の下で、国学者・神道家の立場から日本の「尊厳」をいかに守ろうとしたかの努力が明らかになると述べている。「2 宮地嚴夫の経歴、学問的背景、社会活動について」と「3 宮地常盤、宮地再来の著作及び思想について」では、上記2冊の自著から、宮地嚴夫、宮地常盤・再来父子について、綿密な調査に基づいた概説を行っている。「4 宮地嚴夫の「大教法」構想について」において、宮地が平田国学を継承し、神道を中心とした世界の宗教の再編成を志向した「大教法」構想について、断片的な資料から復元を試みたものである。その結果、「大教法」構想において宮地は、明治期の日本でもてはやされたハーバート・スペンサーの「社会進化論」を「神代」という過去の道徳を明らかにする平田国学に導入し、未来の道徳を明らかにする新たな国学へと転換させようとしたと結論付けている。この「大教法」構想は、『世界太古傳實話』として纏められることになったことを本章で明らかにした。「5 宮地嚴夫の世界認識1——「亜細亜」への視座——」、「6 宮地嚴夫の世界認識2——「西洋」への視座——」、及び、「7 宮地嚴夫の日本論」においては、19世紀の世界情勢を宮地がいかに認識していたかについて、彼の著書を基にアジア諸地域、西欧諸国、日本の順に論述している。これらの章で、当時の世界がウェストファリア体制の下にあり、「文明国」とされない地域は西欧列強の植民地になる熾烈な弱肉強食の世界のなか、日本の「尊厳」を守ることが宮地の思想や活動の根底にあったことが指摘される。「8 宮地嚴夫と平田系玄学」において、キリスト教の「God」に対応するものとして、宮地の「大教法」構想の核となる「天之御中主神」について詳述している。「9 『世界太古傳實話』の分析」においては、公刊された2種類の『世界太古傳實話』について、一方が宮地自身の監修本で、他方が宮地没後に教派神道関係者による抄出本であるとし、特に後者の方の編集上の問題点が指摘されている。「10 宮地家情報を元にした「天津祝詞」の解釈についての一試論」においては、宮地嚴夫・宮地再来に関する自著の研究成果を利用することで、長年不詳とされてきた「天津祝詞」に対し、平田国学の立場から新解釈を提示している。「11 おわりに」では、目的を完結できなかったものの、宮地の「大教法」構想は、黒田氏のいうところの「Westphalian sovereigntyという時代的雰囲気」のなかで、過去の「神代」に「道徳」を求めれば良しとする国学研究を「社会進化論」の提示する未来の文明社会の「道徳」を先んじて解き明かす研究に向かわせようとした、いわば、国学研究史上における歴史的転換となる発想であると結論付けている。

本論文は、多くの著作物が散逸や門外不出、あるいは贋造・捏造されているなかで、綿密な調査とち密な分析で、宮地嚴夫、及び宮地常盤・再来父子の神道研究や平田国学の継承と発展の足跡を復元し、記述することによって、先

行研究における多くの誤りや不明箇所を明らかにした点において、極めて意義のある研究であるといえる。一方、宮地の「大教法」構想に影響を与えたハーバート・スペンサーの「社会進化論」については、本研究で非常に重要な概念であるにもかかわらず、宮地のスペンサーについての幾度かの言及と、当時流通していたスペンサーの著作の日本語翻訳のみを調査し、原典にあたっていない。したがって、宮地嚴夫のスペンサーの思想に対する理解・誤解についての考察が全くなされていない。また、黒田氏のいう「文明国」でない国家を認めないとする「ウェストファリア体制」のもとで、日本の「尊厳」を守ることが「大教法」構想や『世界太古傳實話』の執筆、そして一般の日本人に向けての啓蒙活動の根底にあったというが、宮地嚴夫がウェストファリア体制をどのように理解していたか、そもそもウェストファリア体制を認識していたかの調査や考察が非常に不十分である。そういうところから、言語文化的広がりや深さ、及び論文全体を通しての論の展開の整合性という点において、やや不満の残る論文である。しかしながら、それらの欠点はまた発展の契機ともなりうるし、その意味で黒田氏の場合さらなる発展が大いに期待できる。

このように本論文は、幕末から大正期にかけての国学・神道の研究者だけではなく、欧化主義に対する対抗言説として現れた国粹主義、及び、日本主義の研究者にとっても貴重な研究として評価できるものである。以上のように、本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。